様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 3 月 31 日現在

機関番号：16301
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2007 年度～2010 年度
課題番号：19401028
研究課題名（和文）故宮博物院に収蔵される甲骨文の来源踏査—未刊本『甲骨刻辞』の解読を通して—
研究課題名（英文）Original Investigation of Oracle bones stored by Natinal Palace Museum-Through the decipherment of Unpublished “Jia Gu Ke Ci”-
研究代表者　東　賢司（HIGASHI　KENJI）
愛媛大学・教育学部・准教授
研究者番号：10264318

研究成果の概要（和文）：
本研究は、近年中国で発見した甲骨文の拓本約 380 葉を基礎資料にした、未刊本と当時の社会状況の関連について調査した海外学術調査である。この資料の中に編者の記述があるが、『甲骨刻辞』という著書は、現在でも出版されていない。当初故宮博物院に収蔵された甲骨であろうと推測していたが、拓本資料の半数の甲骨片が北京大学に現存しており、この資料は初期の北京大学で収蔵された資料を中心に編集されたものであろうと結論づけた。

研究成果の概要（英文）：
The present study is an overseas science investigation that investigates the relation between social circumstances the unpublished book and at that time at the time of made about 380 stone-print leaves of inscriptions on bones and tortoise carapaces discovered in China in recent years basic material. Be able do the in existence of half of shell bone splinters of the stone-print material in Beijing University, and this material to conclude it even though the one having been edited mainly for the material stored in initial Beijing University though it guessed at first even though oracle bones stored to the reason Natinal Palace Museum.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
総　計	5,300,000	1,590,000	6,890,000

研究分野：　中国石刻学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：馬衡・唐蘭・甲骨文・甲骨刻辞・故宮博物院

１．研究開始当初の背景

未見の甲骨片約300 件を発見したが、その拓本集は、「國立北京大学（表）」「研究院文史部（裏）」の魚尾のついた台紙に無造作に張り込まれている。この資料は3 冊に分かれているが、中巻に書名と編者の記述があり、

それぞれ『甲骨刻辞』、「鄞県馬衡 秀水唐蘭類」とある。この拓本集は、上記の二名が関わっている資料であることが署名から確認できるのであるが、予備調査の結果、馬衡が旧蔵していた甲骨の拓本をとり、出版しようとしていた資料であることがわかった。ただし、拓本集の書名である『甲骨刻辞』という著書は、現在でも出版されていないものである。

２．研究の目的

(1) 馬衡と唐蘭の調査

馬衡は、故宮博物院の鑑定家を務めるほどの学者であったが、主として石碑などに見識を発揮した者である。甲骨研究には、特別な知識や経験が必要であり、それを補うために古文字精通した唐蘭に整理を依頼したと思われる。二人の接点を解明する。

(2)『甲骨刻辞』の読解

この資料には、拓本だけでなく多くの書き込みがある。既刊の文献の名称も見ることができ、読解や資料分析も試みていたことを窺うことができる。この分析を行い、資料中の甲骨の性質や資料の貴重性を明らかにする。

(3) 故宮博物院収蔵の甲骨片との比較

故宮博物院の収蔵品は、近年データベース化が進行しており、閲覧が可能となりつつある。故宮の拓本資料との比較をし、さらに読解作業を行う。

(3) 甲骨片の出自

『甲骨刻辞』の書き込みを見ると、「甲・乙・殷契・前」等の書き込みが見られる。これらは、書名の略記号であるが重要な意味を持つ。元の収蔵者が誰かということである。このことも調査を行う必要のある重要事項である。

３．研究の方法

(1) 甲骨資料の解読

未刊本『甲骨文辞』は、無造作に拓片を貼り付けている。しかしながら、この資料は内容別に刻されていると思われ、知識のある人物が編纂していると思われる。この資料を解読し、刻された時期（甲骨の分類）は、第Ⅰ期～第Ⅴ期までに分類できる）や内容を検討し記録する。

(2) 甲骨片の綴合甲骨片通しをつなぎあわせることを「綴合」という。上記の解読を行い内容を知る上では、この綴合を欠かすことができない。例えば10 文字の甲骨と5 文字の甲骨をつなぎ合わせると、15 文字の文書になるが、甲骨は本来縦長であることが多く、縦に文書がつながる意見は文字数が拡大する以上に大きい。

(3) 書き込みの把握

右図のように、この資料には通し番号と思われる数字の他に、個別拓本の出典（例えば「殷契192」という記述、これは『殷契粋編』の192番のことである）が記されているものもある。既刊の資料との関係を裏付ける証拠となる。

４．研究成果

(1) 馬衡と甲骨文字

1920 年に北京大学は金石学課程を新設したが、その史学系講師となった。1922 年 2 月(40 歳)には国学門に考古学研究室が設けられ、主任となった。馬衡が北京に上京したのはそれらよりも前の事であると推定されるが、金石学者としては、1920 年(38 歳)ころから名声を高めるようになったと考えてよい。考古学研究室で培われた人脈は、その後の研究者としての地位を確実なものとした。考古学研究室では、羅振玉・伯希和・王国維が外部の通信導師となっている。1922 年 2 月 27 日の「研究所国学門委員会第一回会議記事」には

「沈兼士によって考古学研究室が既に設立されたことが報告され、本校が甲骨及び古代画磚を獲得した」という記事が残っている。羅振玉などの古代文字研究者を招聘することにより、北京大学での古代文字研究が加速する。後述の『甲骨刻辞』には、羅振玉が編集した著作の番号が残されることが多いが、馬衡と羅振玉にはこの時点から接点があった。

1923 年 5 月 24 日(41 歳)には、古迹古物調査会が成立し、馬衡が会長となる。会員には容庚や董作賓がいる。「研究所国学門紀事」中には、考古学会が収集した文物のリストが載せられているが、「甲骨類　五四七」とあり、さらには「所蔵甲骨文字…椎拓、拟于下学年印行。」とあり、出版のために拓本が採られたことが確認できる。

(2) 馬衡と唐蘭との関係

唐蘭は、1923 年に無錫国学専修館を卒業し、王国維の弟子となって、甲骨・金文などの古文字を研究するようになった。1929 年頃には天津に居住するが、文学雑誌の編集に当たっていた。1930 年に遼寧教育庁に勤務、1932 年に北京大学国文系講師となり、北京大学での活動が開始される。

馬衡と王国維との関係は非常に良く、唐蘭の北京大学への道は、馬衡によって築かれたと考えてよかろう。王国維は、1924 年に北京大学考古学会が発表した「保存大宮山古迹宣言」に激怒し、北京大学研究所国学門導師の職務を辞任して大学との関係を断ってしまう。しかし、馬衡との個人的な交流は継続していたようで、1925 年秋には、馬衡から送られた漢魏石経残石拓本に感激し、書信を送っている。また、1926 年 7 月 26 日午前に燕京大学で「中国歴代之尺度」と題して講演をしているが、馬衡は暴風雨の中を聴講している。1927 年 6 月 2 日には昆明湖に入水自殺をしているので、北京大学との関係を断った後でも、二人には最晩年まで交流があった。

馬衡は 1948 年(民国 37 年)から 1951 年(中共 3 年)まで、毎日毛筆で日記を付けている。日記は、私的な要素が強いものであり、馬衡の感情を深く読み取ることができる貴重な文献である。その「馬衡日記」には、唐蘭のことが 33 日に渡って記録されている。その多くは唐蘭という本名による記述ではなく、「立庵」という号による記述であることが興味深い。文物を鑑賞したり、博物館の運営について議論したり、種々の記録があるが、1949 年(民国 38 年)9 月 19 日(月)には、以下の記録がある(括弧内は東の補足)。

> 森玉が自宅を訪問し(次のような話をした)。唐立庵と謝剛主に東安市場で会い、立庵が北大を離れ古物館長に就任することを諫めたが、立庵は既に同意してしまっていた(ということである)。彼(立庵)は上海から戻ってきておらず、余が口を挟むことはないであろう。

手稿原本には、書き直しの後があり、一種の心の乱れが読み取れる。王国維亡き後の師としての馬衡にとって寝耳に水の話ではある。ましてや自分が院長である故宮のことである。一言相談があってもいいだろうという無念さや、今となってはどうしようもないというあきらめの感情を読み取ることができる。

(3) 未刊本『甲骨刻辞』

馬衡と唐蘭が編集し、出版しようとしていた『甲骨刻辞』はどのような資料であったのか。馬衡が甲骨文字を収集できるようになったのは、北京大学に勤務してからの時期である。編集は、北京大学に考古学研究室が設けられた 1922 年以降、馬衡が北京大学を辞職するまでの 1932 年までの 10 年ほどの可能性

が高い。後世、1922 年までは甲骨文研究は初期の段階にあると指摘される。「龍骨」と言われる漢方薬に文字が刻まれている事を発見してから、大規模に発掘が行われ、著録・考釈等が出版されている時期である。これをリードしてきたのは羅振玉である。

この当時の北京大学の実情をよく知る人物として傅振倫がいる。彼は 1906 年生まれであるので、唐蘭よりも 5 歳年下である。傅は 1929 年北京大学史学系を卒業し、卒業後は助教となり、大学にとどまっている。当時の馬衡や唐蘭を直接知る人物である。この人物は「馬衡先生在学術上的主要貢献」と表題のある一文を『浙江学刊』1993 年 3 期に記し、また、『傅振倫文録類選』(学苑出版社、1994 年)に「馬衡先生伝」を記している。一種の回顧録であるが、注目すべきはこの文書に『甲骨刻辞』に関する記述があることである。それらによると、『甲骨刻辞』は全六巻、北京大学所蔵資料であり、解放前(中華民国時代)のことであるので、学校の経費が厳しく、文科研究所に封存され、今に至るまで出版されていないと記載している。

更に傅振倫をキーワードにして『甲骨刻辞』について調査してみると、北京大学考古学会の記事に当たった。「記北京大学考古学会」(『博物館学』1987 年 1 期) には、「『甲骨刻辞』『封泥存真』『古明器図譜』『大同雲崗石刻』『興化寺壁画』の著書を整理したものの、印刷ができなかった。」と掲載している。このことからも、北京大学考古学会が収集した甲骨片が『甲骨刻辞』として出版されようとしていたことがわかる。

考古学会が収集した資料は、どこからもたらされたのであろうか。前出の「馬衡先生在学術上的主要貢献」には、達古齊の主人である霍明志の記事がある。『達古斎古證録』という著書があり、当時の収集家として名を馳せていた。霍が収集した甲骨を北京大学考古学会に献じようとしたが、偽物であることを見抜き拒絶した旨の記載がある。しかし、前出の『馬衡日記』1949 年 4 月 30 日には、「霍明志という人物は既に 71 歳になるが、蔵品を国家に寄贈した。霍は天主教徒(カトリック教徒)であるが、私は 30 年も前からのこの者を知っている。北京大学所蔵の殷墟甲骨四箱はその蔵品である。」と記されている。傅振倫は霍の蔵品を偽物であると記述しているが、実際には、真と判定できるものもあり、北京大学に収蔵されたようである。

(4) 既刊本との比較

郭沫若『甲骨文合集』(中華書局、1977-1982)との比較を行った。また、『合集』と一致したものについては、胡厚宣『甲骨文合集材料来源表上編一・二』により、原骨あるいは拓本の収蔵機関、『合集』に採用された拓本資料の出典等を調査し一覧にした。観察の結果は、おおむね以下の三点に集約される。

①原骨の収蔵場所は、北京大学にあると思われる。

②作製時期について、『甲骨文合集』による分類では、Ⅰ期とⅤ期のものが多数を占める。

③拓本の所蔵者について、羅振玉・商承祚・社会科学院歴史研究所・南京師範学院の収蔵品が目立っている。北京大学で収集された甲骨片が、北京大学に関連のある古代文字学者によって先を争うように公にされていたことが想像できる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

1. 東賢司、馬衡・唐蘭編 未刊本『甲骨刻辞』調査記録（補）、愛媛大学教育学部紀要、査

読無、第57巻、207-212頁、2010 年

2.東賢司、馬衡・唐蘭編 未刊本『甲骨刻辞』調査記録、『愛媛大学教育学部紀要』、査読無、第56 巻1 号、291-299 頁、2009 年

〔産業財産権〕
○出願状況（計 1 件）

名称：筆記具
発明者：東賢司、水口浩彰
権利者：愛媛大学
種類：特願
番号：2010-16745
出願年月日：平成 22 年 1 月 28 日
国内外の別：国内

６．研究組織
(1)研究代表者
東　賢司（HIGASHI　KENJI）
愛媛大学・教育学部・准教授
研究者番号：10263418

(2)研究分担者

(3)連携研究者